

家庭科

中 田 泉

1 家庭科における聞き合いの活動

子どもは、家庭科を学ぶ以前から、それぞれの家庭生活を営んでいる。着ることや食べることなど人間の生活に欠かせない必要な行為を毎日行っている。しかし、それらがあまりにも当たり前の日常であるがゆえに、ほとんどの行為が無意識のうちに行われている。したがって、家庭科の授業を通して、これまで無意識のうちに行われていた行為の意味や目的を初めて意識してとらえることになる。どうしてそのように考えるのか、なぜそのようなことをするのか、その考えに至った根拠は何か、どのようにすればよいのかという意味や目的を友達とのかかわりの中で学んでいく。そうして学んだことを自分の生活に意識的に取り入れていくことで価値を見つけ、新たな知識を得るとともに、さまざまな状況の中で学んだ力を使って、生活をよりよくしようとしていく。

子どもの見方や考え方は、ともに暮らす家族の価値観によるところが大きい。自分の生活の仕方が当たり前であり、違う生活の営みに気づく機会が少ない。自分の家族とは違う考え方や暮らし方と出会い、少なからず驚きをもつことになる。正解が一つではないからこそ、友だちとかがかわる中で複数の価値に出会い、学びの質が高まると考える。共通の体験をした友だちの発表を聞くことで、意欲が喚起されたり、共感や認識の違いを発見したりして、おもしろさを感じるのだらう。これが友達と聞き合う学びのよさであると考えられる。

このような家庭科の学びをふまえ、家庭科における聞き合いの活動を次のようにとらえた。

身近な生活における課題を 実践的・体験的活動を通して解決する中で
創造された価値を共有し合う活動

2 聞き合いのステージと活動

家庭科における聞き合いの活動を三つのステージに分けて考える。

(1) D(である)ステージ ～自分を見つめる～

家庭科におけるDステージは、自分を見つめる力を育む働きをもつ。

子どもが日常無意識に行っている行為を意識化し、自分の考えや価値観を認識できるようになるために、授業を通して、子ども自身が家族の構成者であり、生活者であると自覚することは大切なことである。とりわけ自分の姿は、他者に映し出されて見えてくるものである。自分の家庭生活が普通で当たり前だと思っている子どもにとって、友達と自分の家庭とでは家庭生活のやり方が違うという発見があり、それを友達と交流することで、自分と家族とのかかわりだけでは見えなかったものに気づかされる。自分の思いや考えを表出し、友達との聞き合いで自分の生活を見つめ直していく。

(2) T(つながる)ステージ ～知識を獲得する～

家庭科におけるTステージは、実感を伴った知識・技能を獲得する働きをもつ。もちろん、知識や技能を注入すればよいというものではなく、五感を働かせて感じ取らせていく。なぜそうするのかという疑問に対し、試す場を取り入れることで実感を伴った知識・技能が習得できると考える。獲得した知識を用いて、課題を解決するための方法を吟味し、意思決定して次の学習活動に生かしていく。

(3) U(うまれる)ステージ ～実践力を身につける～

家庭科におけるUステージは、工夫して生活を実践する力を育む働きをもつ。頭で理解することと、実際にやってみることは異なる。体を使ってこそ分かることもある。課題解決に向かう際、友達と聞き合う中で解決の糸口が見えたり、工夫したりしながらやり遂げる達成感も味わわせたい。ただし、実践力とは実行して終わるものではなく、その結果から新たな課題を見出し、発展的に課題を解決していく力であり、学習の積み重ねによって、その力は高まっていくものであると考えている。

3 聞き合いの活動のための手だて

先に述べた三つの各ステージにおいて、中心となる手だてを次のように考える。教師の意図的な働きかけをどのように講じていけばよいか探っていく。

(1) 生活行為の意味を意識させる

子どもが無意識に行っていることを教師が問うことで、その行為の意味や目的を意識させる。それぞれの家庭でどのようなことが行われているのかを見たり、なぜそのような行為をするのか、その必要性を尋ねたりさせる。そうすることで、一人一人にイメージをもたせ、友達の意見や考えに、同じだ、共感できると思わせたり、疑問を感じさせたりすることができる。友達との聞き合いで同じ生活行為でもその意味には多くの視点があることをとらえさせる。

(2) 思いや考えが広がる課題を設定する

無意識にとらえていた日常の生活事象の中から問題を見つけ、課題を設定することが必要である。具体的な生活場面を想定し、家族の一員として課題解決に取り組もうとさせるには、なぜだろう、解決したいと感じさせるような課題を意図的に設定する。正解が一つではない課題を設定することで、複数の価値の中から選ばせていく。一人一人の家庭生活が異なる中で、自分の問題として課題解決に向かうことを期待する。

(3) 体験的活動を重視する

聞き合いの必要感を生み出すために、食に関する題材では、五感を働かせて感じ取らせる場を設定する。比較実験や試す場を取り入れ、判断や選択の場を設けることにより、友達と聞き合って得られた価値は、実感を伴う知識や技能の習得に繋がる。

(4) 目的に応じたペアやグループ活動を取り入れる

さまざまなグループ構成を目的に応じて編成する。異なる視点・考えと出会い、話し合う中で新たな価値と出会い、同じ視点・考えに至る過程を聞き合うことで価値が深まる。共感と相違による聞き合いが課題解決の過程をおもしろいと感じさせるものになると考える。

(5) ふりかえりと成果を共有させる

作業の過程では、毎時間行ったことを記録させていく。当初の計画を途中で変更する場合は書き直すのではなく、書き加えられるようにして、試行錯誤のあとを残させる。そうすることで、ふり返ったとき、それまでの過程が大切だということに気づかせ、途中で新たな考えが生まれたときもそれを交流させることで、お互いに刺激を受け、価値の共有化をはかる。

4 実践例

(1) 生活行為の意味を意識させる

① 6年生 「生活時間を見直そう」

自分の生活時間をふり返る際、視点を家族とのかかわりにしぼって見直すことにした。まず、平日と休日の生活時間の使い方を、図に表し色分けさせた。特徴や問題点はないだろうかと問いかけると、これまで当たり前で過ごしてきた日常を今一度ふり返り、全員が何らかの気付きをもつことができた。それらを発表しながら分類していくと、勉強時間や習い事の時間、遊びの時間といった生活の特徴についての気付きや、平日と休日の比較についての気付きが挙げられた。その中で、すでに発表した別の子どもの意見と比較して意見を述べる子どもが出てきた。気付きをもつだけでは意識化することは難しいので、いっしょに過ごすことが当たり前になっている家族とのかかわりにしぼって考えるよう問うと、「休日の食事時間をもっとゆっくりとりたい。」という意見や、「自分だけの時間を家族といっしょに過ごす時間にかえていきたい。」といった意見が出された（Dステージ）。お互いの考えを聞き合う中で、子どもは自分が家族にとって大切な存在であることを実感することができた。

② 6年生 「どんな食べ物を食べているのかな」

多くの視点から自分の食生活を見つめる場を設定した。食事については、ほとんどの子どもが提供されたものを食べているため、どのような食品をとっているかこれまでに意識することは少なかった。実際、その日の昼食や昨日の夕食について尋ねると、「なんだったかな、よく覚えていない。」などの声が上がった。昼食または夕食について土日を含めて調べ、気付いたことをまとめた。それぞれの気付きでは、平日と休日の違いや、毎日摂取しているものは何か、栄養のバランスはどうかなどの視点でとらえることはできたが、一人一人の視点は限られていた。気付きそのものを発表することに抵抗を感じる子どももいたので、どのような視点で気付きを見つけたのかについて考えを交流した。すると、食品の種類や数、好き嫌い、季節感、食べる時間帯、一緒に食べる人、外食・内食・中食といった食事のスタイルに至るまで、多くの視点があげられ、子どもは新たな視点を知ることができた（Tステージ）。ふりかえりでも次のように書いていた。「毎日違うものを食べているけれど、家の人は考えるのが大変なんだろうな。」「毎日野菜をとっていたからよいと思っていたけれど、全体の食品の数は少ないから、もう少し種類を増やせるといいな。」など改めて自分の食生活を見直すことに繋がった。

③ 6年生 「ごはんのみそしるをつくろう」

自分の家庭でのごはんの炊き方やみそしるの作り方を家族にインタビューさせ、作る手順や工夫についてそれを行うとどんないいことがあるのかを考えさせた。ほとんどの子どもが毎日食べているごはんのみそしるであるが、各家庭で作られている様子をあまり目にすることがなかったようで、意欲的に取り組んだ。分からないことや不思議に思ったことを家の人にインタビューし、関心の高さがうかがえた。

米の吸水時間は各家庭によってさまざま、季節によって時間を調節するという意見を聞くと、「わたしの家ではお湯を使うこともあるよ。」などそれぞれの調べてきた結果を隣同士で自然と話し合っていた。その行為の必要性を感じられるよう行為のよさについて考えを交流した。子どもは「実際に作ってみたい。」「おいしいと感じる吸水時間はどれくらいだろう。」「もっとおいしく作るコツを調べてみたい。」と言い、ごはんを炊くときのいろいろな手順や工夫についても聞き合えたことで、なぜそのような手順が必要なのか、これまで気にとめなかったことにも目を向けることができた（Dステージ）。

(2) 思いや考えが広がる課題を設定する

6年生 「ごはんのみそしるをつくろう」

30分以内においしいみそしるをつくろうという課題を設定した。題材導入時にゴールとして、家族のためにおいしいごはんのみそしるをつくれるようになりと子どもと確認した。そのためには、どんなことができるようになればよいかを話し合った。すると、ごはんのみそしるの基本的なつくり方を覚える、実の取り合わせを考える、忙しい朝につくるための工夫を考える、などが挙げられた。

グループでの実習を終えた後のふりかえりでは、「つくる手順や工夫はもうばっちりだ。」「とてもおいしかった。」とする子どもに、「では、家族のためにつくることを想定して、一人でももうつくれそうだね。」と伝えてみた。すると、「一人では自信がない。」「手順は、プリントや教科書を見ながらじゃないとまだ頭に入っていないところがある。」などの声が上がった。そこで、もう一度みそしるづくりをすることとし、一人でおいしいみそしるを工夫してつくろうという課題を設定した。さらに家庭では、朝食のみそしるを飲むことが多い実態をふまえて、忙しい朝につくることを想定し、30分以内につくるという時間の制限を課題に付け加えた。

家族のことを思いながら実の取り合わせを考え、30分以内に作り終えるための手順とおいしさの工夫の2つについて考えることにした(資料1)。手順の工夫とこだわりの視点で考えた実の取り合わせの2つの要素をどのようなバランスで取り入れていくか、友達のアドバイスを参考に課題解決に向けて話し合いに臨んだ(写真1)。「大根を薄く切ろうと思うんだけどどうかな。」「大きさももう少し小さくしたらいいと思うよ。」という意見が出され、初めての一人調理に向けて、どの子どもも真剣に課題に取り組み、実習にも意欲的であった(Tステージ)。

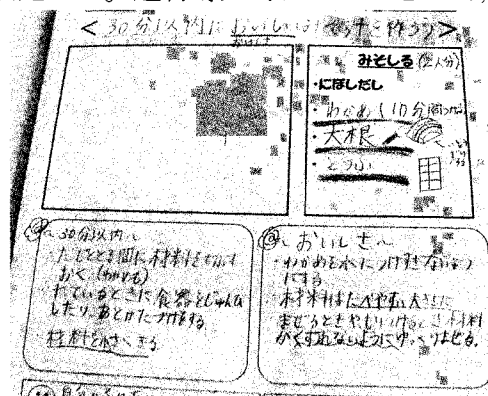
手順の工夫を考える際、早くつくるための工夫に偏り、おいしさの観点が抜けてしまわないように一人調理の際のみそしるの実は教師が指定した3つのグループ(8種類)から1つずつ選択させた。しかし、家庭実践では、実の取り合わせも重要な視点の1つになるので、「おかずの必要性を考えよう」の学習後、みそしるの実の取り合わせについて「家族のためにつくとしたらどんな視点で選ぶか」という課題で自由に実の取り合わせを考えた(Uステージ)。同じ材料を選んでも、「材料の切り方を工夫して、弟の好き嫌いをなんとかなくしたい。」「健康でいてほしいから、栄養のバランスを第一に考えて決めた。」などの考える視点は、家族のことを思っている課題であるからこそ生まれたものだと思う。

(3) 体験的活動を重視する

6年生 「ごはんのみそしるをつくろう」

自分の家庭のごはんの炊き方を調べた後、本当においしいごはんが炊けるのか、試行の場を設定した。「本当に吸水は必要なのか。」「はちみつを入れて炊くとおいしいというけれど、本当かな。」など試してみることにした。比較実験を行い、五感で感じ取ったことを中心に結果と考察をグループでまとめた。(資料2は次頁に記載)

米からごはんへの変化をじっくりと観察することで実感を伴ってとらえることができた。次の



資料1 手際よさとおいしさの二つの

観点で工夫を考える



写真1 みそしるの材料に関する情報を集める

学習活動である「おいしいごはんのみそしるを工夫してつくろう」に各実験の結果をどのように判断して取り入れていくかを定めるための活動の中で、判断が難しいときには、実験を担当したグループにもう一度くわしく結果について聞き取りに行った。実験を担当した子どもは、より具体的に分かりやすく伝えようとし、情報をもらいに行った子どもは、何について聞きたいのかをはっきりさせることで、自分たちの実習で適用するかどうか判断する基準を明確にすることができた（Tステージ）。調理実習が、一人一人の目的意識がうすいままのグループ実習となってしまうと、技能の差にも表れるだけでなく、一人一人の達成感もうすれてしまう。そこで、一人一人が目的意識をもって取り組むために調理実習を2回行い、どの子どもにも調理の機会を保障した。計画を立てる中で1回目の実習での反省を生かし、2回目の課題解決に向けて「もっちりさせたいけれどサラダ油と料理酒のどちらがいいかな。」「みそしるの実やおかずに合わせたい。」といった意見が出され（Tステージ）、ペアでの実習中にはお互いの様子を見合い、課題について聞き合うことにも繋がった。

実験内容		結果	考察
吸水時間	0分	0分はしんが残っていた	吸水がお米をごはんに変える大事なポイントだ
	30分	30分のほうはつやがあった	
どぐ回数	5回	においや手触りに違いはない	ふっくらとさせるには少な目がよい
	100回	5回のほうがもっちりとしていた	
水の量	100ml	少ないとこげる 少ない方はさわるとざらざらしていた	米の体積の1.2倍がよい
	120ml		
蒸らし時間	15分	15分はもっちり、45分はねばねばしていた 火加減がうまくいかずおいしさの判断がつかない	長すぎると食感が悪いので15分でよい
	45分		
水の種類	水道水 ミネラルウォーター	ほとんど違いはないミネラルウォーターのほうが少しつやがあった	つやを出すには水を変えるとよい
米の種類	1種類 2種類	こげてしまったので味の違いがわからなかった	実験がうまくいかずどちらよいかわからない
火加減	常に弱火 強→中→弱	調節しない方はべったりとしていた	音をよく聞いて火加減を調節するとよい
追加①	もち米 15g	かめばかむほど甘みが出る 見た目は同じだがふんわりとしている	甘みが必要であれば入れるとよい
②	はちみつ 15ml	こげたにおいがした 甘すぎてポップコーンのようだった	入れるのであれば量を加減した方がよい
③	サラダ油 大さじ半分	においはない ふっくらもちもちとしていてつやもある	見た目のつやがほしいときには入れるとよい
④	料理酒 大さじ半分	少し甘みが出てやわらかくもっちりとする 鍋にこびりつかずにおいに違いはない	やわらかさがほしいときには入れるとよい

資料2 試し実験の結果と考察

(4) ペアやグループ活動を取り入れる

① 6年生 「どんな食べ物を食べているのかな」

どのような視点で食生活をふり返ったか、自分と友達の意見を比較しペア活動を取り入れた。できるだけ多くの人と話すことで、共通点や相違点が明らかになり、自分の食生活を再度ふり返るための視点をたくさん得ることができた（Tステージ）。「気付いたことをノートに書き加えたい。」「栄養のバランスについて色分けをしたい。」「だれといっしょに食べているか調べていないので、今度はそれも調べたい。」などの発言が相次ぎ、聞き合い後のふりかえりでは、「友達がだれといっしょに食べているかについて話していた。ぼくが調べていないことだった。今

度はそれも調べてみたい。」と子どもに充実感が見られた。

② 6年生 「ごはんのみそしるをつくろう」

本当においしいごはんが炊けるのか調べたことを確かめたいという思いがふくらみ取り組んだ。しかし、確かめたいことはたくさんあり、そのすべてを一人やグループではとてもまかないきれない。そこで、課題別グループをつくり実験させた。実験内容は前述（資料2）のとおりである。実験の手順や準備をそのグループで決めた後、困っているところや迷っているところを全体で共有する時間を設定した（Tステージ）。

全体での共有を取り入れたのは、これらの実験が次の学習活動で全員にとって必要な情報であり、結果を交流する際、共通理解をはかっておく必要があると感じたからである。「とぐ回数が5回と10回では比較にならないと思う。もう少しとぐことが大切かどうかわかるように50回くらいに増やしたらどうか。」といったアドバイスがあり、担当グループは、「様子を見ながらしたいが、5回と100回で試してみることにする。」と実験内容を変えることになった。また、「はちみつを15mL入れるとあるが、それは一人分の分量なのか、それとも今回実験する二人分なのか」と質問も出され、課題別のグループ実験ではあるが、全員が課題解決に至るまでの過程を共有することで、次の調理実習へ見通しをもって取り組むことができた。

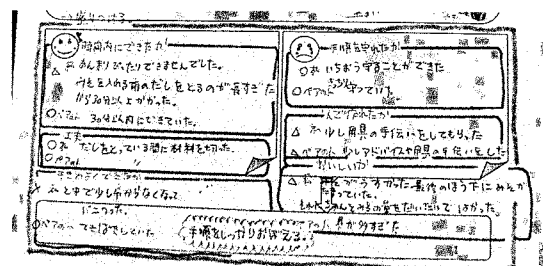


写真2 材料の切り方について聞き合う

次の調理実習では、試し実験とは異なる男女混合4人1グループで編成した。多くの情報を共有できるように実習のペアやグループは固定せずにメンバーを構成することで、新たな知識を獲得したり、手際よさを見て学んだりする機会を増やした。また、一人調理を取り入れた2回目の実習では、みそしるの実の取り合わせのうち同じ材料を一つ使うペアを設定した。それは、同じ材料を使うことで、どのような切り方をすれば手際よさに繋がるか、鍋で煮始めるタイミングはどうかなどの意見が共有化させるためである（Tステージ）。そのための工夫を考えることができ（写真2）、自分が今回使わない材料についての情報も得られた。工夫するめあてをペアで確認し、実習に取り組み、お互いに見合うことで自分だけでは気づかないポイントも評価してもらえ、今後の家庭実践に向けて大きな意欲をもつことができた。

(5) ふりかえりと成果を共有させる

1回目の実習のふりかえりが2回目の実習に反映されるよう、ワークシートを見開きにした。変更や追加を随時可能とし、色分けや記号などを用い、課題にそって、どのような視点でふり返るのかを確認した（資料3）。全員がふりかえりを共有し、次の課題解決に向けての意欲にも繋がった（Dステージ）。



資料3 ふりかえりの視点を明確にした

5 成果と課題

ワークシート

子どもが生活行為を意識することで、なぜそのようなことをするのか疑問をもち、課題解決における必要感が生まれた。その際、課題の設定で正解が一つではない課題を教師が意図的に設定したことで、子どもは友達と聞き合い、多くの価値の中から自分の課題に沿った選択をすることができたことは成果の一つである。しかし、子どもの聞きたい、伝えたいという思いがふくらむ聞き合いにするためには、相手の意見や考えについてもっと質問が出るような課題の設定や発問を工夫する必要がある。